

書評 陣内秀信・新井勇治編著『イスラーム世界の都市空間』

著者	加納 弘勝
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジア経済
巻	45
号	7
ページ	82-87
発行年	2004-07
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00007680

陣内秀信・新井勇治編

『イスラーム世界の都市空間』

法政大学出版会 2002年 x+572+viiページ

か のう ひろ まさ
加 納 弘 勝

I

イスラーム世界の都市に関する研究は最近日本においても活発になり、1990年代初めに羽田・三浦(1991)や板垣・後藤(1992)が公刊された。本書は、編者の一人陣内秀信氏の研究室で進められてきた、中東・イスラーム都市のフィールドワークに基づく「建築分野」研究の成果をまとめたものである。建築史の領域において、近年、「東アジア、東南アジア、日本の前近代・近代の歴史に人気が集まる」一方で、興味深い建築や都市空間が見られる中東・イスラーム世界の都市研究に取り組む建築専門の研究者は一向に増えない。そんな実情のなかで「生活空間の魅力や面白さをたっぷりと描き出すために」出版されたのが本書である。近代における都市のつくり方を反省するために、古い文明圏に分布する複合的なシステムで組み立てられた変化に富む都市空間を解剖し、都市全体の構造的な骨組みを観察したうえで、建築(都市施設、商業施設、住宅)と都市空間(街路、広場)の実測を、1989年のトルコ調査以降、96年チュニジア調査まで陣内研究室は行ってきた。

本書は大きく分けて3部構成をとる。序論にあたる「なぜ今、イスラーム世界の都市か」、I「総論——都市空間の読み方——」、II「各論——多様な都市の生活空間——」に分かれる。「各論」ではシリア、チュニジア、モロッコなどの都市を中心にそれ以外の国の都市も視野にいれ、都市の概観と実在する住宅に注目し、多数の都市図や家の間取り図などが紹介される。

本書の目的は建築学の視点で成果を提供することであると記され、内容もそのとおりである。評者は社会学の視点からイスラーム都市を考察し[加納1989]、都市や都市化、住宅問題から当該地域社会を考察してきた。その立場からすると、「各論」は、あまりに詳細な記述のゆえにイスラーム都市の迷路に入ってしまう感じを受けざるを得なかった。少なくとも、書名のサブタイトルに「建築学からの視点から」などと明記していただければ、覚悟もできたような気がしてならない。

本書の構成は次のとおりである。本書の「総論」、「各論」は、章の形でなく項目をあげているため、本書評でも項目を記し、便宜のために分析される主要な都市名も付記する。

なぜ今、イスラーム世界の都市か(陣内)

I 総論——都市空間の読み方——

都市の空間構造(陣内・新井)／宗教施設と都市のコンテクスト(山田幸正)／商業施設と都市構成(山田幸正)／住宅と住宅地(陣内)／イスラーム世界の都市空間の特質(陣内)

II 各論——多様な都市の生活空間——

シリア——オアシスに持続する世界最古の都市文明——(ダマスクス—新井)／チュニジア——地中海性と融合した北アフリカのイスラーム地域——(チュニス、スース、カイラワーン、スファックス—法政大学陣内研究室)／モロッコ——西端に花開いたイスラームの都市文化——(フェズ、マラケシュ—法政大学陣内研究室)／トルコ——民族性と多様な都市空間——(谷水潤・林佳世子・法政大学陣内研究室)／イラン——東西交渉の結節点——(イスファハーン—深見奈緒子)／中国西域——ウイグル族の住まい——(柘和秀)

II

序論にあたる「なぜ今、イスラーム世界の都市か」では、アラブ地域の旧市街には近代がめざした都市

の姿とはまったく反対の性格をもつ活気あふれる都市の原点が見られるとする。イスラーム都市の旧市街を特徴づける迷路や中庭住宅も、古代から続くアラブの要素と、地中海世界のフェニキアやローマなど古代文化的要素を受け継いだものである。中東・北アフリカ域内の各地域の気候風土、民族性、固有の先行する歴史・文化などを考慮した都市の実態把握が求められる。同時に、ヨーロッパ諸国の支配、影響下で形成された近代の市街地にも、イスラームの伝統社会における都市の性格が受け継がれているはずであり、現代都市におけるこの側面を明らかにすることも必要であるとする。比較研究のなかで「都市のコスモロジー」という視点から中国、東南アジア、インドの都市空間が把握できるのに対して、中東・イスラーム世界の都市と西欧都市にこの視点は簡単には該当しない。筆者たちは違った形で象徴表現から都市を読む必要性を唱える。

「総論」は、構成で示した5項目について指摘をする。以下では「都市の空間構造」など最初の3項目に関して興味深い指摘を紹介し、残りの2項目は、本書評Ⅲの「各論」の紹介において言及する。

「都市の空間構造」として筆者たちは第1に、都市の生活空間に注目し、マクロの視点から見た支配者の側の「計画された都市」、ミクロの側からの行為を集積してつくりあげられる「生きられた都市」の2つがあると指摘する。アラブ・イスラーム都市の住宅地の迷宮空間も、中庭を中心として巧みに都市空間が組み立てられ「生きられた都市」を構成する。イスラーム法が都市の形成に大きく影響するため、アラブ世界の都市こそ、この両側面から見ていくのに格好の対象である。中東・イスラーム都市は特徴として、都市部が交易、商業の空間として非常に活気を帯び、大モスク、マドラサ（イスラーム教の高等教育機関）を伴い、都心部への求心力が高く、都心の公共的な空間を形成する。世界中に交易ネットワークを張り巡らせ、都市には各地から商人や旅人が集まり、メッカ巡礼者や学問を求める人が集まる国際的に開かれた都市を構成する。城門からのアプローチは比較的分かり易い。他方で裏手の住宅地にはよそ者の侵入しにくい迷路状の都市空間が構成さ

れているのである。

「都市の空間構造」として、第2に、本書は都市の成立背景と古代都市の受け継ぎ方にも注目している。イスラーム都市は何らかの形でイスラーム以前の都市を前身とする。メソポタミア・ペルシャ地域では古代の円形都市ウルが成立し、シリア・パレスチナ地域のアレppoやダマスカスはヘレニズム都市の骨格を受け継ぎ、ビザンツ支配下でゆるやかに変化しイスラームの都市社会を受け入れた。北アフリカ地域のアルジェやトリポリはローマやビザンツなどの支配のもとに形成されたが、古代の都市構造と現在の対応はそれほど明確にはたどれない。ローマの都市が備えた道路と水道は基盤のメンテナンスができず見捨てられ新しい都市が構築された。ただし、チュニジアのチュニスやスファックスはローマ・ビザンツの格子状の構造を多少残す。

北アフリカの東と西の端には、塔のようにそびえる高層のよく似た住宅があり、こうした住宅はイスラーム以前に起源をもつ。カイロの前身となった7世紀のフスタートも高層化した住宅をもち、イエメンにも5～6階建ての建物がある。他方、モロッコのベルベルがつくった都市もいかつい高層の住宅群を有する。監視の塔や防衛機能を有したためである。また、ヘレニズム・ローマ都市はバリシカ（列柱のあるホール）、劇場、競技場、公共施設を有し、イスラーム都市はモスク、マドラサ、商業空間、主要な道路のネットワークを受け継いだ。ヨーロッパの中世都市は、中心のカテドラルの広場には商業機能と住機能も混し、公的空間と私的空間の区分が弱い。古代ギリシア・ローマの都市のあり方をより受け継いでいるのは中東・イスラーム世界の都市といえる。

中世に創建されたイスラーム都市には、7世紀に「ミスル」と呼ばれる軍隊の駐屯地として、イラクのバスラとクーファ、エジプトのフスタート、チュニジアのカイラワーンなどが建設された。中心部に大モスク、総督の館を備え、その後、商業機能を付加し、地区のモスク、ハンマーム（もともとは古代ローマ人が発展させた風呂とマッサージの場）ができて、市民にとっての真の都市となっていく。これとは別に、王都として新たに建設されたフェズやマラケ

シュは、中心へ向かう放射線状に延びる道路網をヨーロッパの中世都市のように有した。創建された都市も異なる帰結を迎えた。10世紀にファーティマ朝の王都として創建されたカイロは、中央部に大モスク（アズハル・モスク）を配置し、フスタートと役割を分担し軍事と行政を担った。フスタート廃棄後13世紀に宮殿や官庁を移し、それを契機にスークが発達し真の都市となっていった。逆に、バグダードの円形都市は8世紀に理想都市として構築され70年間機能したが、バグダードの外側への発展が生じると9世紀には廃墟となったという。

「都市の空間構造」として、第3に、イスラーム社会の都市施設に注目する。都市施設として、スーク、ハーン（隊商宿）、コーヒー店やハンマーム、ワクフ（寄進された土地、建物）などがあげられる。これがイスラームでは残り、逆に中世ヨーロッパでは消えたのである。オスマン帝国のワクフはモスク、墓廟、病院、公衆食堂、慈善食堂、店舗からなる宗教複合施設（キュリエエ）であり、住民に恩恵を与えた。

「都市の空間構造」として、第4に、公的世界の周辺に広がる住宅地と城壁外の特徴に注目する。複雑な迷路状の構造、袋小路、部屋が道路の上に掛かるサーバードが典型的な特徴である。ダマスカスやアレppoはハーラ（街区）を重視し、「部分」からの発想をもとに、「全体」の明快な構成を優先した従来の都市計画的な道路パターンを迷路状に変化させた。城壁外に聖者や支配者の廟以外の墓地を配置し、西欧キリスト教徒のように町の中心にある教会周辺に墓地はつくらなかった。この点でもギリシア、ローマの伝統を引き継いだのである。

次に「宗教施設と都市のコンテクスト」に関して筆者は以下のように指摘する。モスクは、アラビア語ではマスジド（masjid）といい「ひれ伏す」を意味し、アッラーに祈りを捧げる礼拝所であって神殿や祠堂でない。最初のモスクとなった預言者の家（聖地メディナ）は、「粗末な中庭式」の建物であった。モスクがモニュメンタルな建築形態を獲得したのは、ウマイヤ朝によるダマスカスの大モスク（709～715年）が建設されてからである。10世紀頃まで大

モスク（会衆モスク）は、カリフの承認を得て一都市にひとつ建設された。大モスクの建設はコミュニティが「都市」になった証であった。モスクは巡礼者、参拝者、旅人、病人、貧者に食事を与えた。

7～8世紀イスラーム勢力によって新たに建設された都市（ミスル、軍隊駐屯地）、例えばバスラ、クファ、フスタートでは大モスクは当初草でできた囲いがあったほど簡素であり、戦闘や布教活動に従事する数千のムスリム兵士を一度に収容できる場であった。そこは外とは区別された聖域（ハラム）であり、コーランの規定がすべて作用する場であった。9世紀に改築されたカイラワーンの大モスクは預言者の簡素なつくりのモスクと違って、堂々たるモニュメントの性格を帯び、堅固な外壁を有し、軍事的な拠点としての機能を担った。世相が安定し都市が発達すれば大モスクは拡張される。モスクは、内庭が表側であり外側は裏であったため、外へ外へと拡大しても周辺の都市空間を乱すことはなく、増殖しながら市街に埋没することになった。11～12世紀、イスファハーンの広場は幅60メートル、奥行70メートルであったが、14、15、17世紀に増築され、現在はそれぞれ150メートルと170メートルに拡大している。

モスクの複合化は11世紀のセルジューク朝の時代に発生し、バグダードではモスクにマドラサを付属させ、教授や学生のための宿坊と給食設備を付設した。セルジューク朝が、活発化しつつあったシーア派に対抗してスンナ派の神学・法学を振興するために設立したのである。その後、病院、公共給水場兼コーラン学校、ハーンカー（神秘主義修道者たちの道場）を付属させたものが建設された。モスクがもっていた機能が分化・発展したのである。

モスクはメッカに向けられたキブラ壁を有し、その方向を明示するためにミコラブと呼ばれる凹部を有する。アンダルシアから中央アジアには、メッカのカーバ神殿の方向を南向きにするモスクがある。預言者と教友たちが真南をキブラとしていたためである。メッカの方向を天文学的に規定することは9世紀には可能であったが、預言者と教友たちの慣例に従うこともあった。既存の宗教施設、敷地の転用

も天文学的キブラとのずれをもたらした。その地域において特に目立つ天体、太陽や星の春分や夏至における方向に依拠したこともあった。サマルカンドには4つのキブラがあり、真南を向いたもの、巡礼の向かう真西を向いたもの、11世紀に算出した方向を向いたものが存在した。

「商業施設と都市機能」に関し、筆者は次のように指摘する。イスラーム都市は広域な都市間交易のための施設を有した。フェズは、アフリカ内部、イラク、インド、アジア方面と交易を行い、カイロにはマグリブ商人が使用した隊商交易施設（ワカーラ）がありフェズ商人の代理人も存在した。交易路型隊商施設は一定間隔で立地する隊商宿で、「キールワーンサライ」、「ハーン」などと呼ばれるものである。もうひとつは都市の中心的な市場と結びついて問屋、倉庫、宿舍として用いられる都市型隊商施設である。先の名称に加えて「フンドック」、「サムサラ」、「ベデスタン」などと呼ばれる。ハーンとその呼称の地域別、時代別の変遷図は興味深い（101ページ）。

ワクフとは特定の所有財産の移転を永久に「停止すること」を意味する。カイロにおいて13世紀からマムルーク朝はモスク・マドラサ複合体をモデルとしてワクフに依拠しモニュメントであるモスクを建築し、オスマン朝のワーリー（知事）たちは隊商交易施設（ワカーラ）を熱心に建設した。マムルーク朝もオスマン朝も一般民衆から統治の認知を得るために政治権力者によるワクフ事業を促進した。分散したワクフを一括して得てまとめて活用する都市再開発としてのワクフ事業も生じた。オスマン朝下で支配者が投資を継続できなくなっても商人など地元ゆかりのある名望家が実施し町の発展を担った。

III

「総論」における残りの2項、「住宅と住宅地」、「都市空間の特質」を、「各論」と合わせて紹介する。

中東・イスラーム都市に顕著な中庭型住宅はアラブ人のもった楽園のイメージを地上に実現したものである。周りを囲み隣の家と壁を共有して日干し煉瓦

を効率的に利用した。都市防御のため高密度の居住は都合がよく、遮断されてプライバシーを守ることができ、厚い壁は暑さなどへの環境対策となっている。

迷路状の都市構造と中庭型住宅は紀元前2000年以前のウルの特質を維持している。家庭のプライバシーを守るため入り口が重視され、住宅の内部を男性の接客ゾーンと女性および家族のゾーンに分ける考え方は7世紀にできたフスタートに見られた。今日、普通の住宅では1階を男性の公的空間とし女性の私的空間を2階にとって上下に分ける。格子窓によって2階は外からは見えないけれども、内からは見える構造となった。西欧ではルネッサンス期になって一部の貴族住宅で快適な住まいづくりが開始されたが、アラブ世界では中世以前から実現し、イスラーム世界では庭園文化を生むことになった。家庭のミクロコスモスは中庭を通じて上に伸びてマクロコスモスと通い合うことになり、屋上は積極的に利用された。屋上には日隠しや日よけが配置され、建築規制も例えばバグダードでは高さは2階までと定めていたのである。

バグダードの住宅は木造であり、その分傷みやすく140年以上前の住宅は少ない。開放的な点ではウルに類似し、1階にも2階にも柱廊（リワーク）をつけている。イラン、シリアの住宅では半地下が利用され、イランでは今日でも庭園型で水盤をもち2階建ては少ない。カイロは14～19世紀に高層化して3～4階建てとなり、住宅内の主要空間は2階以上であって、1階の他の部屋と有機的に結びつけて中庭を利用することはない。15世紀には路上に家のない人々があふれ、古い建物を改造して集合住宅に変えたものができ始めた。チュニスでは中産階級以上の住宅には柱廊があり、1階部分が重要であって接客に用いる。広い空間の奥に「クプー」と呼ばれるアルコーブ（壁面の一部を後退させてつくったくぼみ状の空間）があり親戚や友人をもてなす。チュニジアやモロッコでは内庭と1階の部屋の結びつきが多く、石で舗装し居間のように使うのである。そのうえモロッコでは部屋の扉は内庭に向けて開くのである。

中東・イスラーム世界の都市は身体性、「人間の身体」をクローズアップしている。ルネッサンス以降、西欧が視覚的な秩序を重んじた都市づくりを押し進めたのに対し、アラブ地域やイランの都市では都市全体に視覚的な壮麗さはなく、都市の部分部分を人間の身体感覚に即してつないでいくという都市づくりを押し進めたのである。内庭住宅の居心地よさもスークの賑わいも身体的であり、モスクで人々が身を清める行為も身体的といえる。空間の中における身体性がイスラーム世界の特徴であるとする。

次に、「各論」では、「総論」を前提に以下にあげる都市の諸相を描いていく。都市の全体像、中心となる市場、私的空間の住宅街、喧騒の商業空間、スークと公共施設、都市のコミュニティ施設（カフェから公衆トイレ）、地区のモスク、生き続ける旧市街、伝統的な中庭住宅の特徴、中庭型住宅、住宅のタイポロジー。これらはフィールドワークによる住宅の事例集の順に整理される。各都市に関して都市発展や特徴などが具体的に描かれる。興味深い指摘は多々あるけれども、記述があまりに詳細であり、要点は「総論」にまとめられているように思われるため、取り上げられる都市を示すに留めたい。

シリアでは歴史の集積する都市としてダマスカスを詳細に述べる。チュニジアでは、都市構造、住宅の構成などに限定し、内メディナ（街）と外メディナを城壁がそれぞれ囲む重囲都市としてチュニス、港町で斜面地に展開する斜面都市スース、軍営都市カイラワーン、フェニキア時代に建設され12世紀にシチリアに占領された集積都市スファックスが描かれる。同様にモロッコでは、丘に囲まれた谷間にぎっしりと建物が並ぶ立体迷宮都市フェズ、ジャマ・エル・フナ広場などの喧騒と支配者の王宮と庶民の住宅地の静寂をもったマラケシュが取り上げられる。次に、トルコの都市をタイプ分けし、全体的な特徴を描いた後に、主要な都市イスタンブル、黒海地域のトラブゾン、東部のエルズルムなどが紹介される。その他多くの都市を簡単に取り上げるに留まり、シリア、チュニジア、モロッコにおける記述の方法とは異なる。最後に、イランの都市として熟成された王都イスファハーンを取り上げ、モスク、

マドラサなどを紹介する。

IV

いくつかの点に触れたい。

第1に、「序論」と「総論」において、中東・イスラーム世界の都市を建築学の視点にたって、イスラーム以前の都市の伝統が継承されイスラーム都市として成立していく経緯と、その後の都市発展にさらに継承されていることを興味深く整理している。建築学の視点による都市景観と様々な中庭住宅に関する整理と記述は、中東地域の都市を訪問する我々がもつ印象を整理してくれる。日干し煉瓦のイランの住宅、2003年の空爆で被害を受けたはずのバグダードの木造住宅、柱廊をもった店舗、カイロの町の石でできた高層住宅。中東の都市を訪ねたときのそれぞれの印象を建築学からの説明が裏打ちしてくれる。

第2に、建築学から見たモスクの発生・展開、メッカの方向を示すはずのキブラのずれ、カイラワーン、北アフリカの要塞都市におけるモスクと市街地の位置関係、イスファハーンなどにおけるモスクの裏側である市街地への拡大などは特に興味深い。

しかしながら気になる点もある。第1に、掲載された多くの地図の出所が巻末の図版引用文献・初出一覧まで記されていないことであり、原出所など通常の表記方法で記し、その後は巻末参照などと記すべきであると思われる。第2に、約570ページのほぼ3分の2を占める各論の多さと記述である。有益な資料であろうけれども、各項目ごとに次々と紹介されると、「生活空間の魅力や面白さをたっぷり」と楽しむよりも、都市空間に関する大量の情報に飲み込まれて「楽しむ」余裕はなかったというのが実感である。各都市の「面白さ」をコンパクトに描いていただければありがたかった。

評者が刺激され興味をもった点は、第1に、カイロでは15世紀には路上に家のない人々があふれ、その対策として古い建物を改造して集合住宅に変えたものができ始めたという指摘である。一般に旧市街の住宅が老朽化すると所有者は高級地に移動しそこ

が再分割されていく。中東・イスラーム都市における貧困住宅の発生・展開・その後などは、イスラーム都市を知るときに検討すべき点と思われる。貧困住宅への関心は今日各都市行政体が想定する旧市街の再開発につながり、行政体が準備しているはずの地図やマスタープランの利用も筆者たちにとって可能となったのではないと思われる。イスラームの伝統社会における都市の性格が受け継がれている現代都市を知る一助になるとと思われる。

第2に、イスラーム都市の特徴としてプライバシーの保護が最近のイスラーム都市研究でも本書でも指摘され、イスラーム都市の新しい解釈を可能にしてきた。プライバシーの保護はイスラーム都市社会全体を構成する重要な原理として機能しているのであろうか。かつてイラン革命の初期に、国家権力も個人の住宅までは原則的に踏み込まないという印象を評者はもち日本社会とは違うのかと感じたことがある。プライバシーの保護を、迷路というイスラーム都市に関連させるだけでなく、イスラーム社会に立体的、総合的に関連づけることも可能かと思われる。この点と関わって本書は、イスラーム都市には「都市のコスモロジー」の視点は簡単に該当し

ないため、「違った形で象徴表現から」都市を読むことを提案されているが、それはプライバシーの保護と関わるのか、あるいは、イスラーム都市の身体性、「人間中心の身体性」と関わるのか、もう少し説明してほしかった。

今後、この地域を観光などで訪れる人も都市を研究する人も、ここで取り上げられた都市を歩きつつ、本書の指摘を思い起こして多くの点で納得されるだろうと最後に記しておきたい。

文献リスト

- 板垣雄三・後藤明編 1992.『事典イスラームの都市性』亜紀書房.
 加納弘勝 1989.『中東・イスラム世界の社会学——第三世界における都市と文化と社会統合——』有信堂高文社.
 羽田正・三浦徹編 1991.『イスラム都市研究——歴史と展望——』東京大学出版会.

(津田塾大学学芸学部教授)